子供と馬の話

小川未明

青空文庫

九月一日の大地震のために、東京・横浜、この二つの大きな都市をはじめ、関東一帯の建物は、あるいは壊れたり、あるいは焼けたりしてしまいました。そして、たくさんな人間が死にましたことは、もうみんなの知っていることだと思います。いままで動いていた汽車はトンネルやレールが破壊したために、もう往来ができなくなりました。また、毎晩華やかな街を照らしていた電燈は、装置が壊れてしまったために、その後、幾日というものは、都じゅうが真っ暗になり、夜は、ランプをつけたり、ろうそくをともさなければなりませんでした。

そんなように、いままでつごうがよく、便利であったものが、すっかり狂ってしまって、三十年も四十年もの昔に帰ったように、不便なみじめな有り様になったのでありました。

こういうめにあいますと、いままで、便利な生活をなんでもなく思っていた人々ははじめて、平和な日のことにありがたみを感じたのでありました。そして、また、それが昔のようになるのには、どれほど、多くの労力と日数とがかからなければ、ならぬかということを知ったのであります。

私たちは、けっして、ひとりでに、この世の中が便利に、文明になったと思ってはいけません。たとえば、一つのトンネルを掘るにも、どれほど、多くの人たちが、そのために苦しみ働いたかを考えなければならないのです。

また、電気が、にぎやかな街々につくのも、てんでの家にきたのも、そこには、たくさんな人たちの労力とそれに費やされた日数があったことを考えなければなりません。

こうして、この世の中は、みんなの力によって、文明になり、つごうがよくゆき、そして平和が保たれてきたのでありました。

けっして、自分独りが、どんなに富裕であっても、また学問があっても、この世の中は、すこしもつごうよくいくものでもなければ、また文明になるものでもないことをよく知らなければなりません。それを知るには、こんどの災害はいい機会といっていいのです。

それですから、困っている人たちを困らない人たちは救わなければなりません。そして、いままでのように、みんなが自分の才能をふるって、この世の中のために有益に働き、ますますつごうがよくいくように早くしなければならないのだと思いました。

もう一つ、この機会に、私たちは、知らなければならないことがあります。それは、この世の中のために働いているものは、ひとり、人間ばかりでなく、馬も、牛も、よく人間のために働いているということです。

この、ものをいうことのできない、おとなしい、かわいそうな動物を、心ある人間は、憐れんでやらなければなりません。いじめられるからといっていじめてはなりません。

太郎と二郎とは、よく、朝起きるときから、夜寝るまでの間に、幾たびということなく、けんかをしたかしれません。それは、ほんとうにたがいに憎み合ったからではなく、かえって仲のいいためではありましたけれど、つねにいい争うのには、どちらか無理なところがありました。

お父さんは、どういったら、二人がおとなしくなるだろう。どんなお話をして聞かせたら、身にしみて聞くだろうと頭をなやましていられました。

あるときのこと、お父さんは、近所の人たちといっしょに、夜警をしていられました。なんといっても、まだみんなは、おちつくことができずにいました。そして、火事をどんなにおそれていたかしれません、夜警をしなければ、みんながおちついて、夜も眠ることができなかったからであります。

往来を見ていますと、日が暮れてからも、避難をする人の群れがつづいて通りました。五人連れになったもの、三人連れのもの、また、二人、四人というふうに、いずれも、ぞうりをはいたり、また、はだしになったりして、わずかばかりの荷物を負って、男も、女も、ふうなどはかまわずに、たいていはまったく逃げ出したままの着の身、着のままで、一刻も早く、この怖ろしい都を逃れて故郷の方へ帰ろうとするものばかりでありました。そうした群れが、はや幾日つづいたことでありましょう。

なかには、手を引かれて、もう歩けなくなったのを、お母さんやお父さんに、はげまされて、とぼとぼとゆく小さな子供もありました。

この道を通って、みんなは、汽車の立つ駅の方へとゆくのでした。

「ほんとうに、気の毒な人々ですね。」と、夜警をしている近所の人たちが、その中でも、子供を三人も四人もつれて、みすぼらしいふうをして、さも疲れたようすで歩いてゆく家族のものを見ましたときにいいました。

「休んでおいでなさい。」

「おむすびも、お菓子もありますから、めしあがっておいでなさい。」

夜警をしていた、太郎のお父さんや、近所の人たちは、口々にこういいました。

すると、疲れた家族のものは、こちらを向いて、ちょっと躊躇しましたが、ついに立ち止まって、

「どうぞ、おむすびを一つ子供らにやってください。」と、父親らしい人がいいました。

「さあ、さあ、たくさんありますから、みんなめしあがってください。」と夜警の人々はいって、盆を持ってきて差し出しました。

子供らは、腹が減っていますので、みんなおむすびを喜んで食べました。

やがて、その人たちは、厚くお礼をいって、また道を歩いてゆきました。

「あんなような子供があっては、汽車に乗るのが、どんなに骨おりだかしれません。」

彼らの去った後で、みんなは、その人たちの停車場に着いてから先のことなどを想像して同情したのでありました。

昼から、夜となく、つづいた避難する人たちの群れも、さすがに、真夜中になると、いずれも、どこかに宿るものとみえて、往来がちょっとの間はとだえるのでした。

空を仰ぎますと天の川が、下界のことを知らぬ顔に、昔ながらのままで、ほのぼのと白う流れているのでありました。

「もう、何時ごろでしょうか。」

「二時をすこし過ぎました。」

あたりは、しんとしていました。このとき、あちらから、山なりに荷物を積んで、荷馬車がやってきました。

その荷車を引いているのは、白い馬でありました。そして、先に

立って、手綱を引いている男は、体のがっしりした大男でありました。馬も、男も、だいぶ疲れているように見えたのであります。

太郎のお父さんは、これを見て、

「どこからきたのですか、よほど、遠いところからきなされたとみえますね。」と、やさしく声をかけられました。

ゴト、ゴトと重い荷車を馬に引かせてきた男は、手綱をゆるめて立ち止まりました。

「横浜から、今日の昼ごろ出かけてまいりました。これから、もう一里も先へゆかなければなりません。馬もだいぶ疲れています。」と答えました。

「そうとも、ここから横浜までは、十里あまりもありますからね。」

「六郷川の仮橋を渡ってきなすったのですね。」

「ええ、そうです。また、この荷物を下ろして、すぐに、今夜のうちに帰るつもりです。」と、馬を引いてきた男はいいました。

「また、遠い道を帰るのですか。」

「あすの晩方に、あちらへ着きます。そして、あさっては一日馬を休めます。」と、男は、答えました。

夜警の人々は、この話を聞いて、人間も、馬も、どんなに疲れることだろうと思いました。

こんなことは、平常多くあることでありません。汽車が通っていれば、汽車で運搬されるのです。こうした、変事があったときは、みんなが助け合ったり、骨をおらなければならないのであります。

男は、また、手綱を引いて、ゆこうとしました。すると、馬は、もうだいぶ疲れているものとみえて、じっとして、歩こうといたしませんでした。もっとこうして、休んでいたいと思ったのでありましょう。

しかし、いつまでも、男はそうしていることができないのを知っています。休めば、休むほど、疲れは出てきて、だんだん歩けなくなるものだからです。

「ど、ど、さあ、歩くだ。」と男は、馬を心からいたわるように、やさしくいいました。

このとき、男は、けっして、馬をしからなかったのでした。ひとり人間だけではなく、馬でも、牛でも、感情を解するものは、しかるよりは、やさしくしたほうが、いうことをきくものです。

馬は、また、重い荷車を引いて歩いてゆきました。

「こんなときは、馬もなかなか骨おりだ。」と、そのとき、太郎のお父さんといっしょに夜警をしていた人たちは感じたのであります。

翌日のことでした。太郎と二郎とが、またちょっとしたことから、けんかをはじめましたときに、お父さんは、昨夜見た、あわれな子供らや遠いところから歩いてきた馬の話を二人にしてきかされました。

「かわいそうな人たちのことを思ったら、けんかどころではないだろう。」と、いわれましたときに、二人は、ほんとうに感心をいたしました。

太郎と二郎は、自分のいままで読んでしまって重ねておいた雑誌や、書物や、またおもちゃなどを不幸な子供たちにあげたいとお父さんに申しました。

「それは、いい考えだ。」とお父さんはうなずかれました。そして、二人は、またお父さんに向かって、

「白いお馬は、もうお家へ帰ったでしょうか。」と兄弟は、一日

の間に幾たびも思い出しては、聞いていたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　4」講談社
　　1977（昭和52）年2月10日第1刷発行
　　1977（昭和52）年C第2刷発行
底本の親本：「ある夜の星だち」イデア書院
　　1924（大正13）年11月
初出：「童話」
　　1923（大正12）年11月
※表題は底本では、「子供《こども》と馬《うま》の話《はなし》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：へくしん
2020年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供と馬の話

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/